

# 武家名目抄稿

稱呼部

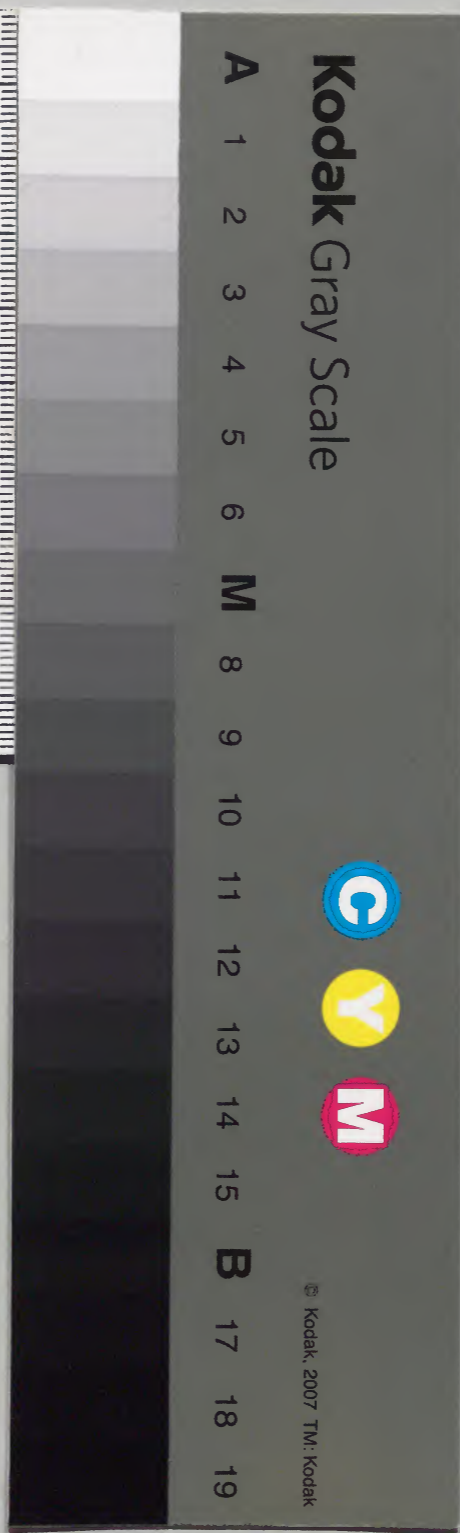
壹

和書門		二五二〇六	類
架		七七	函
冊		四五六	冊

和書		二五二〇六	類
冊		四五六	冊
架		一三	函

四百冊九冊  
稱呼部

内閣文庫		番號	和 25206
冊數		457	( 96)
函號		153	275



武家名目抄稿第一冊

稱呼部一目錄

武家

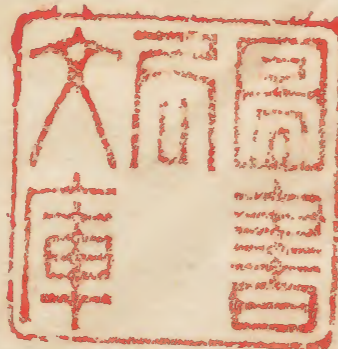
武家棟梁

武家長者

弓箭家

弓箭長者

弓箭棟梁



弓馬家

弓矢取

弓取

武門

武將

武家名目抄稿第一冊

補呼部一

武家

<sup>六六ウ</sup>吾妻鏡云文治二年二月廿五日癸酉北條

殿自<sub>二</sub>去年<sub>一</sub>在京執行武家事之間於<sub>事</sub>賢直

貴賤之所美談也而或不善之者補北條殿

一<sub>下</sub>知<sub>レ</sub>欲<sub>レ</sub>押<sub>二</sub>取<sub>一</sub>七條細工<sub>鑑</sub>就<sub>二</sub>訴<sub>一</sub>申職事被

尋<sub>二</sub>下<sub>一</sub>之仍北條殿殊驚騷今日則陳謝之云

云

四、十五ウ

康富記云應永十九年正月廿九日今日和

田亭行向有連歌傳聞今日廣橋臣相兼宣

卿出仕夏自武家御免也

又云文安六年四月二日今日祈年祭也月式

依無武家十一、十四ウ延引之故先於陣被勘日時了日兼

頭左大辨申汰而除日被任云々八座仍藏人佐綱光被奉行也

又云文安六年四月五日丙辰祈年穀奉幣

御訪事中武家奉行方者定無子細欵是也

為少事之御訪先少支羽翼且為成奉公之

勇粗言上如件

又云文安四年十二月廿七日七九丁亥高大史

員職語云今年伊勢太神宮造督行事方本

樣使諸道輩可下向候處依公方要脚不足

令延引了或年延不可然之由武家奉行聞

圖等申汰之間以山門禮拜講御料足先

被引違被下向之由ニテ本様使年内發向  
之分被治定云々

東寺執行日記云永享五年六月廿一日即

影堂上普檜皮北野ノ寛蔭坊十方勅進之由

後日聞及也武家様所お尋之奉加百費也

園太畧<sup>十三</sup>云文和元年五月廿六日兼豊宿祢

示申云参劾遠江軍從先日入勢州之由風

聞、已越江州之由一昨日飛脚到來武家

以外騷之躰也道譽可發向之旨風聞

今川大雙紙云武家の人ハさの之かうを

きハひろ也又々さなるもひろ也志何之に

おひふうとと流るハさきなりお構く口のみ

おひふうとと流るハさきなり

拾苾記云文龜二年七月十八日武家参賀

為御参内御昇進等御禮銀劔二腰ツ、持

参

参

又云延德三年六月廿九日就武家御屋遷  
并御參内始今日各參賀銀劔二腰、持  
參

又云延德三年九月三日參武家御陣所申  
御禮翌日歸宅了

松西記云貞和五年八月十六日駒率奉行  
職事頭中将定宗朝臣於黑戶語云御馬悉  
於江州軍勢押妨之由左右馬寮申之不到

未仍度々雖被仰武家不事行之間令延引  
云々

又云貞和五年九月九日晴等持寺八講結  
日也武家類被申之間兼領狀仍未刻着裝  
束參彼寺院八講了

後

後愚昧記云永和二年三月廿二日武家恩  
賞泚汰給云々執柄直衣始字損參裝束

又云後愚昧記云貞治二年七月十九日丙

戊酉時刻自畑飛脚到來經世經光等進狀  
當國守護仁木兵部大輔稱伊世仁木跡為  
所望當庄差上波々伯部僧訛阿去十五日  
上洛了於武家念可有支汝法者

<sup>前</sup>又云貞治二年三月十九日己丑晴勅撰事  
日未武家執奏子細有之而重々被經御汝  
汝被仰前中納言為明卿云々

又云貞治二年九月一日丁卯齋天氣如春

自今日武家八講云々僧名追可尋注之

又應安四年記云上棟日時同日乙酉時申  
二默輩者無楚忽之儀可被經御汝法者也  
於武家有抽賞之汝汝公家之御汝法有何  
滯哉仍且言上如件

應安四年卯月 日 所司等上

又云應安四年正月十六日自去十一日令  
行聖天拱於任承法印宇治住房行之明日

可結願也而淨住院僧良瑜武家祈禱計

會之間重座去夜令結願云々

又云應安六年十月十七日自今日武家行

五壇法云々

又云應安七年四月廿七日武家今年始而

參佐女牛若宮云々

又云永和三年正月十三日武家產可為天

下一同之穢哉否可注進之由被仰下之旨

謹奉了准本ノミ搦倒一帝注進仕候以此旨可有

御奏達候哉兼遠恐惶謹言

又云永和三年九月廿七日雨下終日霏然

神水渡御宇治云々是依東北院門主西園寺子

息與西南院相論維摩講師事物惣衆徒者西

南院方也可被退治東北院之由訴武家之

處軍勢進發遲々故也

又云永和四年三月廿七日直書慮見之取



肝要載權大納言源義滿元參議左近中将

尊氏卿親父義詮卿例也藤原仲光中畧自五位藏人補藏

人頭之系先規殆希依武家一鉢本之以武家

拳達被任之云々不及理非先規等汝汝

莫言云々

又云永和三年七月廿八日霽霽及晚天陰今

日於山門金輪院山徒之月輪院寄合戰此

間兩方聚徒衆金輪院三千人余寄手及一

万人云々武家之輩所緣各見訪云々坂下

合戰連々雖有之如此無日集大勢事近來

不聞及事也

又云永和四年四月十七日今度幕下事西

園寺大納言公永并一條大納言經嗣等競

望之於公永卿者武家邊以二品局權勢私

計之間令超越實時卿由風聞然而任理運

被任實時卿了可謂善改乎

又云永德三年二月十五日今夜資康仲光  
卿等為左府使參仙洞而無御對面入御々  
持佛堂可被切御腹之旨被仰之云々是為  
武家可奉配流之旨依有荒說如此被仰歛  
云々

又云應安四年正月廿一日任承法印洞院  
家督事再良瑜僧正一座宣旨中車等事示  
送之彼案等繼之兩事共以佳武家執奏被

行云々

又云永德三年五月一日晴今夜武家佛眼

法妙法院結願也自去廿五日所始行也地

震祈禱云々

又云應安三年十二月二日自今日武家於

寺持寺為故義詮卿忌辰始行五々日八講

云々

又云永德三年正月廿三日霽未刻以後陰

傳聞攝政所領二ヶ所自武家被取放云々  
又云永和四年十二月十五日今夜可有六  
條殿并北山行幸之由風聞之處依武家南  
方進發停止了云々

又云永和五年後四月四日霧大樹參内之  
時役送殿上人等頭中将親雅朝臣基明朝  
臣以下五人依武家鬱申被行罪科云々  
又云應安二年七月廿七日自今夜南禪寺

新造樓門破却、自武家付奉行召集番匠  
令壞之云々佛閣破却希代珍事也山門添  
威光禪宗失權威之秋也是併武家泚汰有  
若已々故也  
又云永和三年七月十八日雨下武家女性  
未隨身小一献也今夜止宿侍所  
佛覺寺北麓搦取惡黨等強盜等或自殺或  
去死四五人云々或又搦取了云々

又云永和二年七月廿六日傳風武家五壇  
法結緣依彗星變也云々中壇三寶院僧正  
又云永和五年二月廿七日世上事以外之  
間可有行幸叡山之由風聞是大樹為退治  
佐々木大膳大夫土岐大膳大夫入道等可  
進發之間可有行幸他所之旨武家申之故  
云々  
又云永和五年二月廿一日今夜可有事之

由世間稱之中今夜有事者主上可有臨幸  
之由有御用意云々武家若有申旨欲御驚  
動凡不得其實者也然而今夜又無殊事明

了  
太平記云 相摸入道 或夜一献ノ有ケルニ

相摸入道数盃ヲ傾ケ醉ニ和シテ立テ舞  
事良久シ若輩ノ奥ヲ勸ル舞ニテモナシ  
又狂者ノ言ヲ巧ニスル戲ニモ非ス四十

有餘ノ古入道醉狂ノ餘ニ舞ヲ舞ナレハ  
風情可有共覺サリケル處ニ何クヨリ来  
トモ知又新座本座ノ田樂共十餘人忽然  
トシテ座席ニ列テソ舞歌ヒケル其與甚  
尋常ニ越タリ暫有テ拍子ヲ替テ歌フ聲  
ヲ聞ケハ天王寺ノマヨウレホシヲ見ハ  
ヤトソ拍子ケル或官女此聲ヲ聞テ餘ノ  
面白サニ障子ノ隙ヨリ是ヲ見ニ新座本

坐ノ田樂共ト見ヘツル者一入モ人ニテ  
ハ無リケリ中略彼媚者カ天王寺ノ妖靈星  
ト歌ヒケルコソ恠シケレ如何様天下、  
邊ヨリ天下ノ動乱出来テ國家敗ヒシ又  
ト覺工哀國主徳ヲ治ノ武家仁ヲ施シテ  
消<sub>レ</sub>妖謀ヲ被<sub>レ</sub>鼓ヨカシト云ケルカ果シテ  
思知ラレ、世ニ成ニケリ

武家棟梁

梅松論云今度ハ以の之の國ハ清幸阿ら  
人をらんすと沙汰ありし時分潛小松山院  
後を後出ありしハ海中の強勁中をわきなり  
は上を中より取敢て魚一として急来るハ警  
固を遣さるるる諸人胃の徳を以て將軍  
の御所へも申されし一た軍一ハハおもておとろき  
ある後集巻もなすくして家徳の人く少御對面  
有る御られたるハ中運ハ天道のさるむる所な

里油智の強弱ふよる魚ううと御出されたる  
ハ夢なる人々天下の將軍邸家の棟梁して  
後集巻後集報をとり申すも是なれとも大敵の  
君を逃しなす此驚もなすの事一其不思議の  
事と申す可なる

太平記云 下 節度使 日向條 上 叔兵庫入道々 勤細川  
阿波守和氏佐々木佐渡判官入道々 譽左  
馬頭殿ノ御方へ 参テ此事如何可有ト評

定シケルニ將軍ノ仰モサル事ナレトモ  
如今公家一統ノ御代トナランニハ天下  
ノ武士ハ指タル事モナキ京家ノ人々ニ  
付噸テ唯奴婢僕從ノ如ナルヘシ是諸国  
ノ地頭御家人ノ心ニ憤リ望ヲ失トイヘ  
トモ今マテハ武家棟梁ト成ヌヘキ人ナ  
キニ依テ心ナラス公家ニ相順者也サレ  
ハ此時御一家ノ中ニ思召シ立御事アリ

ト聞タランニ誰カ馳参ラテ候ヘキ是コ  
ソ當家ノ御運ノ可閑初ニテ候ヘ云々  
又云龍馬進今ノ政道只抽賞ノ功ニ不當  
譏ノニニ非ス兼テハ綸言ノ掌ヲ翻ス悼  
アリ今若武家ノ棟梁ト成ヌヘキ器用ノ  
仁出来テ朝家ヲ福シ申事アラハ恨ヲ含  
ニ政道ヲ猜天下ノ士糧ヲ荷テ招サルニ  
集ラニ事不可有疑

武家長者

異制庭訓錄云古刀刀鑑版卷弓箭兵仗之比  
持之如武家長者

親長卿記云文明四年八月十七日今日有

多田廟所

故正四位下  
源滿仲朝臣

贈位宣下并親王宣

下等事先書仰詞就故滿仲朝臣廟所勤事

可有贈位否若有贈位者階級同可被斗申

矣諸卿申詞云大司

一條兼良公南都  
卿座以書狀申送引入

道左馬頭源滿仲朝臣遺廟鳴勤事驚入候

但近日天下<sup>優</sup>亂為彼子孫確執之間祖靈

驚覺頗與時相應候哉

中所詮廟所鳴勤

者連綿儀候多武宰鳴勤時者氏長者捧告

文致祈禱之仍以彼例先為源氏長者可有

懇祈之條可然歎之由為勅定可被斗仰之

條可為如何候哉云々

太平記云

武藏野  
合戰條四陣八御所一揆卜三



萬餘騎二引西ノ旌ノ下ニ將軍ヲ守護シ  
奉テ御内ノ長者國大名閑ニ馬ヲ扣ヘ夕  
リ

弓箭家

太平記云節度使尊氏卿默然トシテ暫ハ  
物ト不宣良有テ我譜代弓箭ノ家ニ生シ  
僅ニ源氏ノ家ヲ殘ストイヘ共承久以來  
相摸守カ顧命ニ隨テ汚家羞名恨ヲ積メ

リシヲ今度繼絶職達征夷將軍望興廢位  
極從上三品是臣カ依微功イヘトモ豈非  
君厚恩哉戴恩忘恩事ハ為人者所不為也

四百九四、四十六ウ

義貞記云遠江國住人土方三郎同四郎本  
領訴詔ノ為ニ在鎌倉シケル或日彼三郎  
御所ヨリ濱ノ宿へ飯ル三浦若狹前司ハ  
濱ヨリ法華堂ノ宿所へ飯ルニ中ノ下馬  
橋ニテ打合夕リ若狹前司ノサキニ馬引

セタリ黒馬也長八寸希代ノ名馬ナリケ  
リ土方是ヲ見テ弓。矢。ノ。家。ニ生テ一日ナ  
リ共懸ル馬ニ乗テ死トモ死ハマトソ申  
ケル  
三百九十一  
富樫記云去程ニ四山々内ノ衆參河守ニ  
奉向申次第平生御成敗廉直ノ間山内ノ  
軍兵最中追取籠申ス城中ノ躰ヲ見ルニ  
唯今可有御生涯全命自焚ノ代ヲ御待ア

ルヘニ打圍欲落申參河守宣フハ志ノ程  
嬉シト虫氏穢シ富樫ノ御紋猿アレハ都  
鄙トモニ無隱唯今引退程ナラハ弓。箭。ノ  
家ノ疵夕々ヘシト推通り切腹シ給フ

弓箭長者

太平記云 雲景未  
未証條 此山伏申ケルハ廿九事  
モ有ラニ 棧敷ノ顛倒ハ惣シテ天狗ノ態  
計ニモ非ス故ヲイカニト云ニ當関白殿

ハ忝モ天津兎屋根尊ノ御未天子輔佐ノ  
臣トシテ無止事上臈ニテ渡ラセ給フ梶  
井宮ト申ハ今上皇帝ノ御連枝ニテ三塔  
ノ貫首國家護持ノ棟梁圓宗顯密ノ主ニ  
テ御座ス將軍ト申スハ弓。矢。ノ。長。者。ニテ  
海内ノ衛護ノ人也

弓箭棟梁

東乱証云永正十六年八月十五日早雲庵宗瑞

伊豆國燕山ノ城ニテ逝去シタマフ則當至修禱  
寺ニテ一返ノ廻ニナシヤケル遠言ニマカセ洛陽  
紫野ヨリ大徳寺流ノ長老ヲ呼下シナリ小  
田系ノ湯本ニ仰園丘築山号ヲハ龜湯山ト  
云別稱ハ早雲寺及天岳宗瑞大禱定ツト  
号ス喜ナルカナ此日マテ弓。箭。ノ。棟。梁。トシテ  
威勢ヲ東國ニ振ヒ多日ハ又引カヘ卯塔一搦  
ノ露ト滴果終フ

弓馬家

太平記云

箱根竹下合戦條

尾張右馬頭自曾一陣

ニ有ケル力敵ノ馬ノ立様旌ノ紋京家ノ

人ト覺ルソ矢ダウナニ遠矢ナイソ只按

連レテ懸レトラ三百餘騎雙漕弓馬ノ家

ニ生レタル者ハ名ヲコソ惜ノ命ヲハ惜

マヌ者ヲ云處虚事カ実事カ戦テ手益ノ

程ヲ見給ヘトラ一同ニ時ヲ咄ト擧ケ喚

テコソ懸タリケレ

吾妻鏡云文治二年三月廿六日甲辰以紀

伊権守有経為御使被充申丹波國篠村庄

於松尾延朗上人中此上人者多田新發滿

中八代苗裔對馬太郎義信對馬守男也出

累葉弓馬之家入一寶圓乘之門凡顯密兼

備内外相應之碩德也云々

明德記云修理大夫宣ケルハ何様先由良

ノ寺へ参詣シテ心智上人ノ御サウハ  
ノ靈地ニ結縁申へシトテ船人ニ暇夕ヒ  
テ由良ノ奥国寺エツ参リ給ヒケル則長  
老見参申サレテ今ハ夢現ツノ浮世ニ心  
ヲ留ムヘキ思モ無トテ偏へニ出家ノ志  
ヲ望ミ申サレケレハ長老モ哀ニ思召テ  
涙ニ咽セムテ申サレケルハ昨日マテハ  
山名ノ棟梁トシテ朝夕弓馬ノ家ニ携リ

給ヒシニ今日ハカシコノクワイ門ニ入  
テイワシカ禅衲ノトウリヨト也云々  
栴松禪云曩祖武藏守益徳守府將軍秀郷  
朝臣源平小物款平將門を討死てあゝ孫々  
徳守府將軍の裔を慕へ五代將軍の流胤な  
り累代武藝のちまねをのちへ弓馬の家  
の  
遠志也

鹿島治乱記云此時鹿島ノ要害ニハ東ノ

城主右衛門大夫輔林左京亮其外近臣之面々七百余入城内之老若驚怖スル事不斜依之兩人申ハ城中守無勢ニテ心不採要害ノ普請未出來敵ハ思之外多勢ニ候間一先ツ退此要害東之城へ御移総別之乞加勢重而御本意可然之由諫言ス義幹曰恐ニ受弓馬之家生ハ死之基ト覺悟スルハ勇士之道也今初テ非可驚云々

弓矢取

太平記云 楠出張天 王寺條 楠暫思案シテ云ケル

ハ合戦ノ勝負必シモ大勢小勢ニ不依只士卒ノ志ヲ一ニスルトセサルト也サレハ大敵ヲ見テハ欺キ小勢ヲ見テハ畏レヨト申事是ナリ先思案スルニ先度ノ軍ニ大勢ヲ負テ引退ク跡へ守都宮一人小勢ニテ相向フ志一人モ生テ歸ラント思

者ヲモ候ハシ其上宇都宮ハ坂東一ノ弓。  
取也紀清兩黨ノ兵元來戰場ニ臨テ命ヲ  
棄ル事塵苴ヨリモ尚輕クス其兵七百餘  
騎志ヲ一ニシテ戦ヲ決セハ當手ノ兵縱  
退ク心ナク共大半ハ必可被討

又云廣有射怪鳥條主上餘敵感有テ其夜聽テ廣

有ヲ被成五位次ノ日因幡國ニ大庄二箇

所賜テケリ弓矢取ノ面目後代マテノ名

譽也

<sup>四ノウ</sup>伯耆之卷云墨長ハ鎧一隔テ母の御前ヲ奪

奪の子細を具テ被申ク其ハ母室ひけるハ弓

箭取のうける事ふ合むことうてより為思

徳事也其妻ふとなりて命をうなる

その根ハナクねともう秘テはる知里ノ事也

は遠くありふ存とも呼あて今ノ最最後

の是系を記してあり義高弟ハ整りと記

何より名跡の惜しむるを付別て不知なる  
こそ然しこれ殿のころも和原系も一不  
て何ふも事と思ひなす何り嬉しうま  
とて泣きぬるありさうまうとくはまんか  
なき

應永記云民部思ケルハ今日ノ合戦ハ日  
比ニハ替り大将ニ不離者共思々ニ討死  
ス弓矢取ハ千度ノ高名ヲシタリ共最後

ノ死様悪シケレハ失名事アリ於我ハ一  
番ニ進出テ捨一命留名後代ト云儘ニ  
向フ敵ヲ切拂ヒ大将ノ前ニ馳塞ル

<sup>十三</sup>甲陽軍鑑云山孫三郎多清去屋み語ていそく  
侍り武士道の沙汰なり大身少身のうんき中時詞  
大方定りより先身より國持をさう矢取と申  
才二ふ一郡一陣斗の侍大將をハ武部志と申  
三ふ少身なる人をハ兵と申



太平記云楠河内國金剛山ノ西ニコッ楠  
多門兵衛正成トテ弓矢取テ名ヲ得タ  
者ハ候ナシ

弓取

<sup>上</sup>平治物語云義朝郎等ニ武藏國住人長井  
齋藤別當真盛ソカシ留ント思ハク寄レ  
ヤ手柄ノ程見セントテ取テ返セハ大衆  
ノ中ニ弓取ハ少モナシ叶シトヤ思ヒケ

ニ皆引テソ歸ケル

太平記西源院本云和田楠與箕浦次箕浦  
郎左衛門軍條

四郎左衛門進出テ申ケルハ御方小勢ナ

リトモ志ヲ同シテ戦ナハ日本ニ雙ナキ

弓取ト名ヲ得タ和田楠カ間ニ一人モ

ナトカ亦取テハ有ヘキト云

義殘後覺云平岡推六母ハ盃ヲスヘシト  
遂義死一條

テ三献酌テ推六ニサシテ弓取ノ習ヒナ

レハ歸り候ハシコトハ定メナシ若モ墓  
ナクナリ候ハ、後世ニテ逢候ヘシ斯ハ  
云トモ目出度歸リテ二度母ニ見ヘ給ヘ  
應仁畧記云今度山名への道何ふよりそ馬門  
津安坊の一伝中沙汰をるやうんおのひすふさ  
る次第なりこれき分國播磨の事一の道一船の  
中ふ此遠返替候の至極存内を合んで昨日を  
送るゆへ歎部への差れあま片執部の中り

申直一興黨社力を以て却志を達せん孫歟  
公方豊大右指南中ハ此軍敗陣を廻りさうに  
播磨依出流の法下急思ひのすゝの次第なり  
又云五月廿五日細川と山名方一押寄より上ハ  
山名方前下ハ一桑村平之の橋前後ある三ヶ所の名  
戦なり中軍討刺到其と見えより早船己年の  
刻箭軍始つて申面が跡よりはあ陣おて出  
た力おて言名記はふあこそは年事違ふと

取する家々弓執勝者なりと云ゆえは

又云今の世保多年牢人となれる其創めを尋

ぬまゝ父の大指を主 持頼 云なり隠れなき弓。

取なきしに取上善く彦院殿持代上意ふより

去ぬる永享十年多武筆一在傳の時伊勢長陸

被傳付加の傳ふおあて 三編の 打在るま子位

牢人となれり

鐘田雙紙云鐘田多味正清をなかりひなきか

の若くはらふ志ふやのちん五筆弓をとりて

各人ともをえするわとのりのなり是三人とも

うん少は彦張の部 うまきてもうやほくうこれ

強ふまゝ

十九

さうおおちめさう云まさき十命ころる

おひふまゝそれ弓とりとやはきのふ人の

へらふわの刃のくくなれハをまはしやとそ

んてさゆもまつとみてあれはま



義輪軍記云云ふ十九歳山成釋迦年居佛

鞠弓尉陶隆とて古今多。石向栢の古長刀を授

ふ可ひこみ多幣う申一割とハ命を不惜戦け

る五前年款二千八人馬より志逆様お切落し

その身ハ鏝ふまきも而授えの城く引入け

る云々

判官物語云云備の少田部五千きのせむを

しとてとむとりてせとくえんとうくある正月に

甲ふりり法き同林一りりう備とて履の事

んさんふたてむあんのきのくひとてとて

中きれき以つくめりのくひをねう一控

と馬つつ福あるおあ履のらうとてとて

写知多満と申りのふとくゆと中をれハうの

くハくそあうてう海と中よるを一知て

事ふてハ取れともいへる志結ひつるとの

馬き志よくなり志あひの履とさひ志あめ



とをさうゆへにみちさうれきねをかまらざる物  
つねうへにのりのうな人ことふ法をとりてを  
や九節ふつきくる日つて一人とてねら  
うなるりのこそなれ中されともまらうひ  
のたねとてうひをうけよとておりのを  
まねふゆへに由井のもまねハ浦人のとまね  
めひうへにみそのあられたる三百石をゆへに  
きりれハゆへにまねゆめと申きねをふひん

なり國と成られハ志すき物あり縁ハこそと  
らさうり免かうなるりのくひをえくさ  
らしてそあのおらまじゆるあうひをえ  
うへにたをまをりねはさ浦のうへに  
法をゆへにふ法うらねるせうちゆへに  
ぬんのうへにうへにあらるなまともふひんや  
おのりゆへにれらんぬらうへにゆへに  
一石世にゆへにやうへにゆへに

人

おろむ<sup>り</sup>む<sup>ら</sup>う<sup>へ</sup>も<sup>も</sup>こ<sup>れ</sup>お<sup>と</sup>の<sup>ゆ</sup>も<sup>と</sup>り<sup>あ</sup>ら

く<sup>し</sup>中<sup>を</sup>矢<sup>矢</sup>

義貞記云致頼一ノ矢夕ハサニ一ハ矢ハ  
ケテ門外ニ立タリシ弓取ヲ射ル矢ヲ放  
アヘス背ハ子ニ一犬ハカリ致頼飛退ク  
弓取一人矢ノ下ニ射卧セ又今一人ハ弓  
取今ノ弦音ニ付テ矢ヲ放ツ云々  
多田双紙云くくま田丸吹あつたあつた

らひ矯くくもくもく多きなり其りのうな弓取  
の也子と生れゆよりま君の所家お替る御き  
事をはおひひりあけてはひとりあはれ  
う<sup>ら</sup>ま<sup>ら</sup>し<sup>し</sup>中<sup>中</sup>ま<sup>ま</sup>こ<sup>こ</sup>親<sup>親</sup>の<sup>の</sup>所<sup>所</sup>家<sup>家</sup>お<sup>お</sup>替<sup>替</sup>る<sup>る</sup>御<sup>御</sup>き  
事<sup>事</sup>こ<sup>こ</sup>そ<sup>そ</sup>幸<sup>幸</sup>あ<sup>あ</sup>て<sup>て</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>も<sup>も</sup>や<sup>や</sup>く<sup>く</sup>親<sup>親</sup>を<sup>を</sup>め<sup>め</sup>さ<sup>さ</sup>れ<sup>れ</sup>ひ<sup>ひ</sup>あ  
よ<sup>よ</sup>御<sup>御</sup>前<sup>前</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>け<sup>け</sup>ま<sup>ま</sup>り<sup>り</sup>を<sup>を</sup>う<sup>う</sup>ま<sup>ま</sup>く<sup>く</sup>身<sup>身</sup>の<sup>の</sup>ゆ<sup>ゆ</sup>の<sup>の</sup>あ  
あ<sup>あ</sup>お<sup>お</sup>ひ<sup>ひ</sup>て<sup>て</sup>ハ<sup>ハ</sup>西<sup>西</sup>海<sup>海</sup>を<sup>を</sup>か<sup>か</sup>と<sup>と</sup>も<sup>も</sup>を<sup>を</sup>く<sup>く</sup>中<sup>中</sup>に<sup>に</sup>海<sup>海</sup>  
左<sup>左</sup>國<sup>國</sup>能<sup>能</sup>云<sup>云</sup>唯<sup>唯</sup>意<sup>意</sup>き<sup>き</sup>海<sup>海</sup>を<sup>を</sup>あ<sup>あ</sup>ん<sup>ん</sup>と<sup>と</sup>て<sup>て</sup>嫡<sup>嫡</sup>子<sup>子</sup>肥<sup>肥</sup>翁<sup>翁</sup>



書法其年物の具ありて為給へるは中法ん  
し思ふよりやあらん摩斗抱搦粟かとり  
まゝつゝあつて免酒を授心首途を移心  
給ふ内少も名給をりなる氣を足る外か  
ら門心も移ふ云の業を給よつゝ以てさるる  
取の妻の心移る給ふつゝくなくとおねを侍る

武門

五、廿四才

吾妻鏡云元暦二年十二月廿三日壬申前

對馬守親光為公家為武門抽大功訖而不  
意兮被改任國可還任之由類愁申之間二  
品所被執申之云々

應仁畧記云持也一夫あまひして万葉の表  
杖をむらふ事ハ武門の精徳より出て國象の  
安業を後以うらうゆ一平上宮くはハ用明  
の長子として勅任を辭し崇峻推古の帝徳  
をうらり併法哉ひろ免えりあふこころを



武畧をくわりのく逆臣をあらはし海内をお  
さへんと万国を志つる者な  
み云々名山の名の<sup>た</sup>何ふよりく勝つ依安城  
の一版や沙汰をもやらんおひよりする次第  
なり是を分國據おのりの道一節の申ふは  
遠近禁懐の至極存<sup>内</sup>を念んて月日を送る  
有歎武のの益れ有<sup>取</sup>る<sup>又</sup>都の申<sup>作</sup>申<sup>執</sup>申<sup>申</sup>  
吾黨の力をひて申意を達せん福歎云々

武将

吾妻鏡云建久四年五月廿二日丁亥若公  
令<sup>獲</sup>鹿給事將軍家御自愛餘被<sup>差</sup>進<sup>提</sup>原  
平二左衛門尉景高於鎌倉令<sup>賀</sup>申御臺所  
御方給景高馳参以女房申入之處敢不及  
御感御使遂失面目為<sup>武</sup>將之嫡嗣獲原野  
之鹿鳥強不足為<sup>希</sup>有楚忽專使頗其煩歎  
者景高歸参富士野今日申<sup>此</sup>趣云々

又云文治五年九月七日甲子宇佐美平次  
 實政生虜泰衡郎從由利八郎相具參上陣  
 岡云々仍重忠手自取敷皮持来于由利之  
 前令座之正禮而誘云中奥六郡内貴客備  
 武將譽之由兼以留其名云々  
 太平記云將軍御哀十九哉武將ニ備テニ  
 十五年向フ處ハ必順フトイヘ斥無常ノ  
 敵ノ来ルヲハ防クニ其兵ナシ云々

又云下節度使同日ノ午刻ニ大将新田左兵  
 衛督義貞都ヲ立給フ元弘ノ初ニ此人廿  
 シモノ大敵ヲ込シテ忠功人ニ超タリシ  
 カトモ尊氏郷君ニ咫尺ニ給ニ依テ抽賞  
 サマテモ無リシカ陰徳遂ニ露レテ今天  
 下ノ武將ニ備リ給ケレハ當家モ他家モ  
 推並テ偏執ノ心ヲ失ヒツ、付不隨云者  
 無リケリ

廿五、十五ウ

又云 楠正行 先年奥州ノ國司顯家郷安部

野ニテ討シ武將新田左中將義貞朝臣越

前ニテ亡之後ハ遠國ニ宮方ノ城郭々々

有トイヘ凡勢未振ハサレハ今更驚ニ不

且云々

<sup>四ウ</sup>應仁畧記云をよそ控のうま一仁のをぞねる

たまあにちよくたうをおおひ國の武將のあ

る一以ますよ裁をよめるなき年一似るこれ

まなハちいん一々安慶徳年中このう一歎

云々

十七オ

三好別記云政康もまゐ婦人の武將かれとも

俄のるなれをうなはま一々土御一馬を法

なく云々

小條五代記云信長云ハ知稚より武勇をこのみ

女を學ひ孫をすとの一とも私懇なく忠臣等

貴をほとこ一運小集一々一々の戦ひり討

勝て武將のあまれを去るべし

下ハハウ

別所長治記云秀吉此上ハ無力當國ノ面  
面ヲ四方ヨリ敵ニ請我爰ニテ遂一戦ヲ  
長治ノ首ヲ不見播州ノ内ヲ一足モ引マ  
シトテ急キ軍兵ノ手分シテ三月廿一日  
三木ノ城ニ押寄ス此城前ニハ大河流シ  
後ニハ高山峨々トシテ林ニ続テ人家ア  
リ巖峙テ道狭シ殊ニ数代武將ノ別所一

族数ヲ盡シ八千餘騎ニテ楯籠近邊之侍  
大将淡河志方櫛橋神吉高砂野口端谷此  
人々ハ無隱武勇ノ士我城々ニ楯籠リ敵  
三木へ寄スルナラハ十方ヨリ駈寄敵ヲ  
可追拂軍兵ヲハケマシ待懸タリ

武家名目抄稿第一冊

凡書之目...  
...

...

...



...

...

...

明治十六年二月

獨校 佐々木泰久



